



シンガポール当代華文文学への視角

著者	石 其琳
雑誌名	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報
号	25
ページ	141-155
発行年	0014-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000453/

シンガポール当代華文文学への視角

石 其 琳

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Singapore

Kilin SEKI

前 言

本論は、中国現代文学のジャンルである微型小説の作品を継続的に研究するものである。中国現代文学の微型小説のジャンルを考えた場合、中国本土の作品の他に、広範囲で「世界華文文学」の範疇において、この文体の作品は多く、広く知られている。東南アジア地域の華文文学作品は、華僑という存在があるが故に、長い歴史を持ち、現地での華文教育が行われるとともに、華文創作も進んでいるのである。今回は微型小説文体の作品を対象に、『新加坡当代華文文学作品選』（上、下）（注①）を中心に、その地域と社会の特徴性を含め、創作に関わる多方面の問題を考察する。

本論の研究方法は、まず今回取り上げる作品集の編集などについて、さまざまな情報、背景について説明し、さらに具体的にいくつかの作品を基に、その内容を取り上げ、問題点を考察する。そこで、本論を展開するにあたって、まず現在日本で出版されているシンガポール文学作品集について知る必要があるため、その点について触れておく。

I 日本におけるシンガポール文学作品集について

これまで日本において、シンガポールの文学作品を含め、東南アジア地域の文学を紹介する訳本は、既にいくつかが出版されている。ここでは、本論がとり上げる作品集の特徴背景との相違性を検討するために、まず既存の二種類のシンガポール文学に関する作品集に触れておく。

「その1」は：『シンガポール華文小説選』（上）（下）である。上巻は1983年、下巻は1990年に

出版されている。その1の「上」「下」2冊の翻訳小説作品集について、それぞれの原書では、実際に関連する対象出版物ではなく、日本初のシンガポール小説作品集であり、その（下）の「訳者あとがき」が述べているように、『シンガポール華文小説選（下）』と表題したのは、1983年に翻訳出版した『シンガポール華文小説選（上）』の続編という意味である。そして、（上）は1945年から65年独立までの作品を集めた『シンガポール・マレーシア華文文学大系』全8巻小説集2巻の抜粋を訳したもので、（下）巻は、独立以後の作品集である。上下の連携によって、シンガポール華文文学の邦訳は一応、時期的に完結したと説明している。さらにこの（下）巻の冒頭にある原作品集の「編者」のまえがきによれば、下巻の作品は現地で出版された『吾土吾民創作選』（注②）によるものであると記されている。要するにこの上、下二つの作品集は、創作年代的には、継続性はあるものの、それぞれの作品集の編集趣旨は異なっている。この点について、今回本論がとり上げる作品集を考察するにあたって、深く関連するため、ここではまず「上」「下」二作品集の編集趣旨及び時代背景などについてみていく。

『シンガポール華文小説選』（上）は、現地で1945年から1965年までの作品を『新馬華文学大系』の小説巻より選出している。原書の編者が書いたまえがきには、「馬華文学」（シンガポール・マラヤ華文文学）について、三つの重要点を提示している。

(1) シンガポール華文文学の発展は以下三つの重要段階を区分することができる。

- ①第2次世界大戦終結以前の時期。(1945年以前)
- ②第2次世界大戦終結以後からシンガポール独立までの時期。(1965年まで)
- ③シンガポール独立以後。(1965年以後)

(2) シンガポール華文文学は、その内容テーマからみれば、社会発展に従い、1947年から始まったといえる。またシンガポールの作家は、中国から渡来したのか、シンガポールの地で育ったのかは問われず、思想、意識の面で変化が起り、中国の文学の支流でも付随物でもなく、描く対象は数千里離れた中国の人物、風景ではなく、熱帯の地であるシンガポールの現実を反映した作品になっている。文章は常にシンガポール人が常用している口語や方言が使われ、濃厚な地域的色彩を醸し出している。

(3) この作品集で選出した小説は1945年から1965年まで発表された16人の作品である。

そしてシンガポールにはプロの作家はいない。小説はすべてアマチュア作家によるものであるが、独立後には高いレベルの作品が多数発表されていると述べている。

以上の三点、シンガポール華文文学の発展を理解するためには、欠かせない重要な要素と言える。この時代区分は、後に多くの作品集の編纂時、収録作品の選定にも影響していることは明らかである。訳者はシンガポール華文小説が日本で初めて出版されるため、上巻の「解説と訳者あとがき」において、「馬華文学」の意味、発展の歴史及び政治、社会などの背景について、説明を加えている。ここでその内容について、とくに注目したいのは、作品の言語表現とそれに深く関わるシンガポールの言語教育問題に対する指摘である。

この問題は、中国現代文学研究にあたって、常に触れられる問題であり、香港など周辺地域の

文学、または中国本土の創作においても、地域性を強調し、芸術的表現をするために、方言を取り入れることは珍しくないのである。実際世界において、大きい言語圏での文学についても同じ現象がみられる。たとえば英語圏とは言え、それぞれ英語を使用する国、民族が使う英語の相違性は、地域的、文化的要素が強く含まれていることは明らかである。

シンガポールの作家たちの自己意識の変化がとても重要な問題とされているが、ようするにシンガポールの「華文文学」が中国文学の支流ではない位置から脱出でき、「シンガポール華文文学」として確立しなければならないのである。しかしシンガポール華文文学として、確立するためには、地域的色彩を出すだけが、唯一の絶対的条件ではないのは否めないであろう。

編者はまえがきの最後に、この作品集で選出した17編の小説は、シンガポール作家の代表作であるが、シンガポールにはプロの作家はいなく、小説はすべてアマチュア作家によるものであると説明する。この選集の作品について、現地でも高いレベルの作品と評価されたものである。しかし作家としての位置づけが混沌としている。このような社会現象の背景には、シンガポールの歴史、政治、民族構成など多くの現実要素が関係するのであり、作家たちの意識変化に関しても、単純に根付いたからだけでは片付かない問題も多く潜んでいる。これらの点について、のちに検討を加えたい。以下はもう一つの文学作品集を見ていく。

「その2」は、『東南アジア文学への招待』（注③）の中に、一章「シンガポールの文学」を設けている。この作品集の特徴は、シンガポール作家が描く英語文学を取り上げた点である。訳者である幸節氏が冒頭の解説に、なぜ「英語文学」なのかについて、この「シンガポール英語文学」は、シンガポールにおいて、英語以外に文学的表現手段を持たない人たちによって、創りつつある文学であると定義している。

この解説の内容に、特に注目したいのは言語の背景についての説明である。シンガポールの植民地時代の英語は宗主国の言語であり、公用語として特権的地位を占めている。現在シンガポールでは、マレー語、タミール語、華語（北京語）、英語が公用語である。憲法上の国語はマレー語になっているが、象徴的意味にすぎず、事実上の国語は英語である。独立直後から二言語政策が採られ、英語が強調されると同時に、英語教育が社会的栄達に有利であると考えられ、他の三言語で教育を行う学校への入学希望者が減少したのである。1979年に大学予科における教授用語が英語に統一され、80年に、華語教育の牙城であった南洋大学が、英語教育のシンガポール大学に吸収合併されている。さらに87年には小学校第一学年より、全生徒が英語を第一言語、それぞれの「母語」を第二言語として教育を受けることが定められ、英語の地位は決定的なものとなっている。二言語政策と言っても、英語は柱である。1979年には華語推進運動が行われ、中国との経済交流の機会の増大を予測して、華語の重要性が高まるとともに、それを話す人が増加したが、実際には大多数の中国系住民の母語である中国語の方言、つまり福建語、広東語などに変わって、北京語（華語）を共通言語としているが、英語が最有力であることには変わりはないと分析している。そして若い世代には英語が普及された結果、イギリスの標準英語と異なったシンガポール英語ができつつあると指摘する。

また「英語の位置」について、氏はシンガポール政府が事実上の国語にした理由は、民族に関する問題が常に微妙である多民族国家にあって、英語は民族的に「中立」した橋渡しの言語であると同時に、国際語、科学技術の言語、内外投資家の言語として、経済的發展に不可欠であること、さらに植民地時代からの公用語として、司法、立法、行政などの公的記録の連続性を保持するために好都合であると述べている。しかし、英語は現政権の権力維持に欠くべからざるものであり、世界のいかなる言語も決して「中立」、「無色透明」ではありえず、世俗性にまみれているのである。だが、英語が中心化——マレーシアでマレー語が中心化され、英語が脱中心化されているのとは対照的にシンガポールにおいては、それは単にその使用能力が個人の世俗的成功を約束するという意味を超えて、政治性を帯びた特権的な言語であると指摘している。

上述「その2」でとり上げた「シンガポール文学」の作品は、すべてが英文の詩作である。英語創作もシンガポール文学の一つの形になっていることは、当然ではあるが、しかし7割あまりの人口が華人である以上、長い歴史のつながりを持ち、これからも世代が伝承していくなか、英語で話せて、英語で文章を書いても、実生活のなかでは、どこかで華人的な生活習慣と文化思考の要素が潜在していることも考えられる。英語作品の存在と發展がさらに定着されることは、当然シンガポール文学として無視できないのである。以下は、この現実を踏まえて、本論がとり上げたい作品集を考察することで、華人社会、華文作家が抱える問題を明らかにし、シンガポール社会において、華文文学創作の位置づけを考える。

Ⅱ 『シンガポール当代華文文学作品集』 について

この作品集は、2010年香港の「明報月刊社」とシンガポール「青年書局」の共同出版である。選集の冒頭に、総編集長である陳榮昭氏の総序によれば、この選集の出版にあたって、重大な意義ある事業だったと言っている。次は、この総序の内容に沿って、『シンガポール当代華文文学作品集』の編集宗旨および内容について考察する。

一 出版の意義について

一つ目の意義とは、シンガポール青年書局は1955年に創立され、上述した南洋大学の成立と同時期である。当時シンガポール社会の華文教育の体系が整えられ、書局責任者の陳孟哲氏は、1958年から図書の出版に力を入れ始めたのである。以後50年間、多くの文学作品集を出版し、文学史に貴重な資料を提供し、保存してきたのである。今回この作品集のほか、『シンガポール当代作家作品選』、『世界当代華文文学精読文庫』が香港の出版社との共同出版について、国を超えた出版事業として、意義が大であると陳氏はいう。これはシンガポール以外の地域と華文文学関係書籍の共同出版により、華語圏における「華文文学」読者層を増やすとともに、華語圏への市場拡大が期待できると考えたのであろう。

二つ目の意義とは、この選集の出版にあたって、シンガポールの四大文芸団体「シンガポール

作家協会」(1970年創立)、「シンガポール文芸協会」(1980年創立)、「錫山文芸中心(センター)」(1990年創立)、「熱帯文学クラブ」(1997年創立)の協力を得て、共同でこの事業を促進させた点である。

この四つの団体は、それぞれ『新華文学』、『シンガポール文芸』、『錫山文芸』と『熱帯学報』の文学誌を発行している他に、文学の叢書あるいは文学関係の研討会、さらに国外の文芸団体との交流などを常に行っている。そして、今回の選集に、三種類の文体「散文」、「詩」、「小説」の編集責任者を、この四つ文芸団体の会長である有力作家たち(注④)が担っていることは、この選集の華文文学進展に対する厚い意気込みが知れる。

三つ目の意義とは、これまでシンガポール、マレーシア華文文学史上において、創作の「南洋色彩」を先に提唱したのは、1927年創刊した『荒島』という同人誌である。その後、現地での本土意識の高揚がみられ、徐々に「僑民意識」を取代し、文学創作意識の主流として定着され、本土の庶民生活、思想、感情と希望を描写することによって、読者に歓迎され、受け入れられたのである。そして今回も「本土重視」の伝統を継続させるため、作品の選定基準は、作者が必ずシンガポールの公民或いは永久権を持つ住民であること、さらに作品の内容は、シンガポール社会を題材にしたものであると、限定されている点も重要な意味をもつという。この点から、この作品集がシンガポールの華文文学における重要な位置づけが示唆される。

二 選録作品の年代について

この作品集の作品は、1980年代から現在まで、最近三十年の優秀な作品を限定して選録されたのである。その理由はこれまですでにいくつかの作品集、例えば『戦後シンガポール・マレーシア文学大系』には1945年から1976年の小説、戯曲、詩の作品、他には上述も触れた『シンガポール・マレーシア華文文学大系』1945年から1965年の作品を収録されている。また『シンガポール共和国華文文学選集』には20世紀40年代から70年代の佳作の作品集を編集されたのである。よって、80年代以後のものが闕如だったため、この作品集の文献的重要性がうかがえる。

(1) 作者層の問題

序文に、陳氏はこの作品集の作者層の年齢について、老、中、青の三つの年齢層であるという。この点に関して、総編集の希尼尔氏が作品集の「前言」(注⑤)にも特別に問題視している。さらに作者の年齢層について、「1952」という数字がこの作品集の六十九人の作者たち平均の生年数字であることを強調する。やはり資歴深厚の作家たちは、小説を創作の主力として考えているようである。彼らは豊富な人生経験及び深い生活観察力を持ち、視野が広く、思考も深厚であるから、この作品集に多数入選しているのである。同時に、新世代の作者が脱落している現実を露呈している。実は今回の作品集には、「八〇後」(20世紀80年代生まれの世代を指す)の入選作者はただ一人だったという結果は、まさに八十年代以後の教育が英語重視の政策の成果で、社会の言語環境に大きな変化をもたらし、世代間資質の相違を顕著にあらわしていると指摘するのである。

ここで特に注目したいのは、創作経歴豊富な作家たちではなく、中青年層の作者たちの存在と活躍である。華文小説の創作にあたって、当然華文の表現力が問われるのである。この作品集に

ただ一人しか選ばれなかったという現実に、シンガポールの華文教育政策の問題が、深く関わるに相違ないであろう。この問題についてのちに検討するが、希尼尔氏はこの問題に関連する、もう一つの特徴を明らかにしている。それは作品集の文体についてである。以下はその点について述べる。

(2) 作品の文体の特徴

この作品集「小説巻」の「前言」に、作品の文体について、20世紀80年代シンガポールを含めて、「アジア四小龍」が経済的飛躍をみる中、文学の創作にも大きな変化と流れを見せていた。当時は「軽」、「薄」、「短」、「小」を旗にする新しいジャンル「微型小説」(小小説)の文体が目され、華語圏に新風を巻き起こしたのである。シンガポールの作家たちもその波に乗り、創作の質と量が好評価を受け、早くも中華文化区域に認められ、シンガポールの社会と学校において、歓迎される文体になったのである。実際、今回の作品集には、60%の作品の文体が「微型小説」と言える。そしてこのように、内容に強烈な本土の氣息を匂わせ、表現手法と形式を強調する深いシンガポール色彩を帯びる「微型小説」を大量に収録する作品集は、近半世紀以来のシンガポール華文学大系および文選にはなかったことである。

シンガポールの現地では微型小説作品を選集としての出版物が少なく、この作品集には小説を多く収録しているが、実際には「微型小説」の文体が大半を占めていることから、この作品集を本論の研究対象として、とり上げた理由の一つであり、その事実はまさにシンガポール当代華文小説創作の一大特色であると考えている。この現象の背後には、シンガポールならではの政治、社会背景の要素を含めて、特に華文教育の制度、形態と深く関わっていることが否めないのである。ここでは、華文小説の創作において、不可欠な現地での華文教育との関係を考察する。

Ⅲ シンガポールの華文教育と「微型小説」創作の関係

文学作品の創作には、当然文章の表現力が問われるのである。よって、華文学の創作の場合にも、必ず重要視されるのは「華文」の表現力である。シンガポールの華人たちにとって、この表現力を高めるには、政府の言語教育の政策とそれに沿った教学の形態が大きく影響されるのである。この章では、華文教育の実践とその教育の問題を研究している資料を基に、シンガポールにおける華文教育と文学創作の関連性をみていく。

シンガポール華文教育研究院の副院長陳志銳氏の研究(注⑥)によれば、多民族、多言語文化のシンガポールは、1966年から既に双言語教育が実施され定着している。(CMIO-Chinese, Malay, Indian, Others)の国民構成のもとで、各母語を習得するが、公的言語が最も重要視されている英語が「第一言語」であり、各母語は「第二言語」として教育を受けている。絶大部分の学生にとって、母語は単科教学で行い、他の科目はすべて英語で行うため、数十年後、英語がシンガポール教育、経済活動の中心言語で、民族を超えた強力な存在になったのは事実であると述べる。さらにこの事実からシンガポールの家庭用語に対しても影響を与えている。シンガポー

ル文部省の小学校一年生華人の新入生に対する家庭用語の調査をみると、2004年以後、英語がしめる家庭用語の割合は1980年の10%から49.8%へ上昇し、初めて華語を超えたのである。反面華語は1980年の約28%から1988年最高の69.2%に上昇した後、また2004年の48.5%へと降下したのである。また華文に対して、20世紀90年代以降の中国経済の崛起により、外来の刺激と推進があるにも拘らず、シンガポールの地で成長した世代からみれば、英語が上流階層の交流に欠かせない条件と考えられている。シンガポール独立後、政治的干渉、経済条件など多くの要素からも英語の地位を不動な存在となし、華文、華語がシンガポールの家庭用語及び教学用語の比率を挽回したいならば、中国が各方面の実力において、英、米国を超えるのを待たねばならないであろうと陳氏は語っている。

ところで、現在シンガポール社会の多くの家庭が英語でコミュニケーションをとっているなか、逆にもっと多くの家庭の親が自分の子供の華語のレベルを心配している。この現象には、親の期待と現実に対する執着の落差が露呈され、甚だしく「言」、「動」の不一致のあらわれである。多くの親は自分の子供が華語を自由自在に使えて、中国の経済発展の波に乗っていけることを期待すると同時に、「言語に対する焦り」の心理（注⑦）から脱出できないため、終始英語を使う家庭環境を堅持している。よって、華文、華語がもたらすシンガポールの教育の重責は、完全に「学校教師」と「補習教師」を担うような実態になったのである。この作り上げられた華語の学習環境は、時間的、状況的には局限があり、華語の習得が非自然的である。本当に少数華文の熱愛者以外、新一代の大部分の学生の華文学習は、ただ学校制度の中の「進学華文」と「面接華文」の受験に対応するものになっている。さらに高校では大学入試に華文が強制的に成績に計算されなくなると、自然に学生たちは、華文の学習から離れてしまうのだと陳氏は指摘する。

そして同著の中に、「シンガポールの高校文学批評についての教学と実践」章（注⑧）にもう一つ注目したい点がある。実際の華文教学における文学批評の授業に、教材の選択に「微型小説」を取りいれていることである。「微型小説」は「散文」の文体と比べて、シンガポールの学生たちにとって、馴染みが薄いがおよそ高校生になってから、はじめて微型小説に接するのである。そして陳氏自身がシンガポールの高校華文と文学批評の授業のために、教材として「微型小説分析簡表」（注⑨）を作っているのである。表には微型小説の解題、分析、構想、修辞、技巧などについて、それぞれ細かく項目を提示し、学生が項目に沿って考察することができるように設計されている。この事実から、シンガポールの若い世代における華文創作に対し、多少なりとも影響がみられるであろう。上述したように、本論がとり上げたい作品集に、80年代以後の作者は一人しかいなかった現実に対して、将来的には、華文のレベルを高め、もっと作品の創作に意欲を起し得るきっかけになる可能性もあると考える。この現状を踏まえて、以下は作品集の中から、シンガポール華人社会の華語力の維持、またはシンガポールの学校における華文教育に対する危機感に関する内容の作品をとり上げ、その実態と問題点を考える。

Ⅳ 華文教育の問題に関係する作品について

『シンガポール当代華文文学作品選』の小説巻には、上下二冊をあわせて69人の作者の139篇の作品が収録されている。中には様々なテーマがみられるが、特に華人社会の問題についての描写が多く、そのひとつ重要なのは、新生代における華文使用能力低下の危機感を示すものである。この章は、とり上げる作品を略訳しながら、テーマを二つの範疇にわけて、考察していく。

(1) 庶民生活における華語問題の困惑を描写する作品

作品① 「ロンドン橋が落ちた」 白荷 (1937～)

王老夫婦は毎日娘のために孫の面倒を見ている。毎朝、娘は2歳3か月の女の子を連れてきて、老夫婦へ預けてから会社に出勤するのだ。孫は活発でかわいくて、老夫婦はその子の面倒を見ることに対して老年時の慰めと思っている。

娘の車の音が聞こえると、すぐにおばあちゃんが迎えに出た。娘は孫を抱いて車から出てくると、赤ちゃんは「イヤイヤ・・」している。よく聞くと、「I don't want! I don't want! I don't want!」と泣きわめているのだ。「昨晩は騒いで寝不足で大変だったの。仕事もいかになくてはいけないし、こんなに苦労が多いのだったら、子供なんか産むんじゃなかった」と娘は愚痴をこぼすのだった。「子供もいないと年取ったら頼れる人がいないじゃないか」と母親。娘は何か続けて言おうと思ったが、赤ちゃんの叫びがやまないのです、お爺さんはすぐに赤ちゃんに「大衛、大衛、おりこうだから、お爺ちゃんが遊びに連れて行くよ・・・」と言いながら、両腕を広げて飛んできた。それを聞くと、娘は大声で怒って「お父さん、何回も言ったでしょう、大衛に華語で話かけないで！でないと、彼が大きくなって、華語をしゃべると仕事が見つからないのよ！」それを聞いて、お婆ちゃんはすぐに「Boy boy! no cry no cry! Ah ma love you, no cry…」娘は安心して車に乗って会社に行った。車が去ったのを見て、赤ちゃんも泣きやんだ。おばあちゃんは「London Bridge is falling down... falling down, falling down, my fair Lady.」王さんは、ロンドン橋が落ちたって、自分に何の関係あるのだ！娘の幼いとき「お客さんが来た、お父さんに会いに来たが、お父さんは留守で、お客さんにお茶を差し上げた。」の華語の歌を教えたじゃないか？どうして孫と華語で話したら、将来孫は仕事が見つからないというのだろうと不満に思ったのだった。

作品② 「あの犬は5チャンネルを見たいのだ」 駱賓路 (1933～)

林お爺さんはある日突然息子の新しい家に遊びに行こうと思った。新しい家には半年前に一度行ったきり、自分たちの旧居と違い、家に入るとその豪華さになじめないため、居心地がわるいからそれきり行かなくなったのだ。「息子に用事あるの？」と妻が聞いた。「別に何もないよ。」と林さん。息子の家に着いて、「どうしたの？何か用事？」と息子。「いいや、別に」と父。「朝食食べた？」「食べた」「座ってね。僕は急ぎのプロジェクトがあるから」と息子。「愛玲は？」母親が聞く。「教会に行った」息子は書斎から返事を。

リビングで老夫婦の相手をしてくれたのは、夜になれば孫といっしょに冷房付の部屋で寝るペットの犬だった。退屈だったので、テレビをつけたが、第5チャンネルが映った。林さんはすぐに第8チャンネルに変えたが、犬が急に林さんに向かって吠えだした。「家族にも吠えるの、このバカ犬!」と林さん。

「彼は第5チャンネルを見慣れたのだ」と息子。林さんはその意味が分からなかった、「オビ! quiet!」犬は静かに書斎へ入った。林さんは何かに気づいた「Something wrong!」と叱ったら、犬がすぐに書斎から出てきた。林さんは立ち上がって、妻に「帰るよ」と、テレビを消した。帰りながら「あの犬は5チャンネルを見たいのだ」と呟いた。

作品①②は第1章で触れた学校教育が英語中心になった風潮の中、老、中年代とさらに若い世代間に生じた家庭内の矛盾を日常的場面で、さり気なく、生々しく描写している。使用言語の相違が相互の気持ちに壁を作ってしまう、心の絆をも崩壊させているのである。

作品③ 「華語を話す物語」 長安人 (1957～)

精神病院に送られてしまった「私」は、一日も中文の本を読まない生きていけない、大の「中文」好きだ。しかし周りは英語の世界なのだ。中華子孫なのに、人々はメンツを保つために、故意に華語を避けている。私は仕事を辞めて別の会社へ就職するが、その会社の上司は華人で、華校出身なのに、拙い英語で仕事をしている。「私」を除けば、周りの同僚たちも英語と「方言」(福建語)しか話さない。しかし時間が立つと、同僚たちも私と同じ華語を話すようになってきた。それを理由に、私は会社を解雇されたのだ。私は抗議運動を起こしたが、頭を殴られ、意識不明状態で精神病院へと入院させられてしまったのだ。病院で目が覚めると、「呉さん、こんにちば。唐文生と言います。文生と呼んでください。」と西洋人の医者に声をかけられた。3か月の入院生活で唐先生といい友だちになった。ある日、唐先生から私は退院できるようになったと知らされ、病院のことを忘れて、現実世界に対応するようにと言われた。退院後またYes or Noに満ち溢れた世界へ戻らなければならない。教えて、私は本当に精神病患者なのだろうか？

この作者のペンネームが「長安人」であることから、主人公が華人として強くアイデンティティの持ち主であることを表現し、精神病患者にされるほど、華語に対する異常な敬遠心理を強く批判しているのである。

作品④ 「邁克米易」 黃孟文 (1937～)

外国からやってきた中国通の大使の華語講演を聞きながら、自分はずっと上手だろうと楊さんは安心したのだった。『海内外』華文雑誌の発表会を局長の身分として要請されたとき断ろうと思ったが、「華人は華語を話す運動」は総理の考案だったから、応対しないといけない。出る前に秘書が作ってくれた講演原稿を何度も練習した。席上担当者が貴賓たちに漢字でのサインを要請した。久しぶり華文を書くのに、彼は戸惑った。緊張で冷や汗をふきながら「邁克米易」とサインができたのだ。

作品⑤ 「私の友たち胡湯美博士」 谷衣（1941～）

私はある宴席で20年ぶりに旧友胡さんと会ったが、口数が少なく、暗い様子だった。ある日ショッピングセンターで偶然にであったとき、オーストラリアへ移民するかもしれないと彼は話した。シンガポール大学で英文教育を受けた胡と違い、私は南洋大学卒華文教育を受けたため、英語が不得意で、昔から二人の会話は英語に福建語混じりだった。同じマレーシア史を研究しているため、英文資料ばかり研究する胡に対して、私は華文資料と視点も大事だと主張する。大学卒業後胡はオーストラリアへ留学し、戻ってからシンガポール大学で講師を務めた。私は後にはアメリカへ留学し、英語力をかなりレベルアップさせ、初級学院で教師を務めることになった。

またある日二人の食事会で、胡は娘の第2の外国語がよくないため、オーストラリアへ移民したいと語ったが、本当は自分が華語のできないことで、自分の国に居辛くなったと感じたからと本音を溢した。どこに行っても華人の顔だったため、華語で話しかけられ、応対できないのでいつも沈黙するしかなかったのだ。レストランでも華語ができないうえ、福建語を話したら、やっぱり華語（マンダリン）で返事がかえってくるし、大学のなかでも華語を話す学生が増えて、少なくとも学生も2言語を話すことが多くなった。自分のような単言語の人間は、肩身が狭くなっていくと眩くのだ。現在では華語を補習するところはたくさんあるからと私は勧めたが、一か月後、胡の一家はオーストラリアへ移民した。

作品④と⑤はともに、華語に対するコンプレックスを描写した内容である。英語中心と言えども、社会自体華人的構造が基盤になっている事実は否めないし、「邁克楊」（マイク楊）「邁克米易」と、書き方を間違った名前のサインをすることで恥をかく皮肉は、この社会の功利的価値観と、どこかに隠れた矛盾と焦りを露呈している。

作品⑤の作者は華裔館の館長を務めている。この作品は1992年に書いたもので、第1章で触れた当時シンガポール社会の華語事情がよくあらわされている。二人の友人がそれぞれ歩む人生の分かれ道から、シンガポール社会の風潮の変化と流れに振り回されて行く。この潮流は、今後も止まらずに変化し続くのであろう。英語中心とは言え、華語の存在と潜在的ニーズと力とは、「単言語」よりも「多言語」の現実を確立し、この社会の基盤的動力になるのではないだろうか。

作品⑥ 「計画教育の成功」 王永炳（1939～）

魯老夫婦は退職後、息子一家はオーストラリアへ移民し、娘はアメリカ人と結婚して、アメリカコロンビアに住んでいる。数年間も会えないままだったし、自分たちのまわりに友達もいないので、毎日寂しい生活が続いていたのだ。

半世紀前、夫婦とも南洋大学の中文学科卒業後、中学校の華文教師を務めていた。職場では英語が中心だった環境中、自分たちはいつも肩身の狭い思いを受けていた。その理由から子供たちに英語の重要性を強調し、いつも注意を回り、第2の言語の華文の学習には粗末にさせたのだった。友だち付き合いもなるべく華人を避けていたため、周りの華人の友たちもみな自然に彼らから離れてしまった。シンガポール政府は2言語政策を強化するなか、子供たちの進学条件が不利

になったため、オーストラリアへ早い時期から留学に行かせたのだ。子供たちが留学している間、親との連絡もだんだんと少なくなった。理由は親の英語力が低いため、コミュニケーションがうまくできないからだという。子供たちは大学卒業後、まさに中国が崛起する時で、政府はますます2言語教育を重視し、企業も英、華2言語話せる採用条件が多くなってきた。娘も就職できたのだが華文力が弱いため、発展性も望めない覚悟で、仕事を辞めてアメリカに行った。子供たちが家を離れた後、自分たちはやはり華語が一番心を落ち着くため、家中全て華語に戻したのだ。

ある年、息子が孫を連れて里帰りした時、テレビで華語番組を見ていたら、すぐに孫から英語チャンネルに変えられ、華文の絵本を買って孫に教えようと思ったら、孫から「No! I hate Chinese!」と言われた。夜息子から、翌日帰るから、遺産について、将来のため、遺言を書き、財産についてはっきりしてくれといわれたのだった。自分たちの大学時代の友だちの子供たちはみな2言語人材で、仕事しながら、両親とも常に一緒に食事、旅行をしている様子を目にすると、自分たちは、友だちを失っただけではなく、今は家族もいなくなって、ますます寂しが増し、嘆息するだけだった。

この作品は、典型的にシンガポール華人家庭における言語教育問題に対しての困惑と矛盾を描写している。このストーリーは決して幻い世界ではなく、強い現実性を伴う内容だと言える。シンガポールの社会構成の背景と特徴が揺るがない基盤である以上、この問題は永久に解答がないのである。この小説から、言語問題はもはや言葉だけの問題にとどまらず、全般的に家庭、家族の矛盾と悲劇にシワ寄せ、家族の絆の崩壊につながっているのである。

(2) 教育現場での危機と問題に関する作品

作品⑦ 「授業がなくなる」 希尼尔 (1957～)

あなたは今年度一番ラッキーな人だ。受験生の補習が不要になったし、家族旅行もいけるじゃない?と聞くと、「そんな心情はない」と返事、さらに「ほかの先生の代わりにスポーツチームを引率して試合に参加しないといけない」と言った。補習授業を受けなくていい学生たちからは、にこにこしてあなたに感謝する。あなたは彼らに手を振って「行け!」と。やはりほかの教科が華文より大事なのだ。授業はないが、あなたはいつものように20年間乗った車で学校に来た。同時に同僚数人に電話して昼をいっしょにしようと。家から出ないといけない。家にいると家族に授業をしなくてもいい理由を説明しにくいのである。車をハイウェイから東海公園へ回して、昼から夕方まで一人で防波堤に、「海があるところには必ず華人がいる。そして華人がいれば必ず海がある」と誰かが言っていた。あなたのショートメールをもらって公園へ行き、あなたを眠りから起こした。惶恐の表情に、あなたは、一つの仕事を失うことを心配しているのではなく、一脈の文化が消えるのを恐れているのだ。海辺へ戻り、二人分の焼き飯を買った。夜妻の実家へ行って、大声で呼びかけた。ドアが開き、岳母が出てきて、「今日は遅かったね?」と。「学生に多めの宿題を配って、質問もあったから」と、あなたはさりげなく答えたが、これは先ほどの夢の中の話なのだ。

華文教育現場で生きる人々の心境を淡々と描いているこの作品だが、華文が背負う深く長い文化伝承の使命は、常に現実に対して深刻な摩擦を引き起こすのである。

作品⑧ 「毀詩記」 長謠 (1944～)

私は「華語啓蒙クラス」(注⑩)参加学生の応募を待っている。英語の応募者が長い列を作っているのに対し、私が担当する華語の応募者は誰も来ないのである。その場で担当の先生方も冗談交じりで、「英語は26文字しかないのに、華語は覚えるのも難しすぎるし、書くのも大変、それにできて何の役にも立たないし・・・」ある先生は「今日一首の詩を覚えたの。聞かせてあげるよ！・・・華人が華語を話すのは当たり前だ。私は華語をしゃべらないが、あなたよりお金持ちだ。」「ハ、ハ、ハ・・・」と。扇風機が回って、ふと私は風で漢、唐の時代にでも飛ばしてこないかと思った。

30過ぎの男が一人の女の子を連れてきて、テーブルの前に立って応募手続きをしようとした。横から「お姉さん！」と小さい男の子が彼女を呼んでいる。彼女の資料を見ると、一年遅れの応募だったので、親に尋ねると、「弟と一緒に来ると、弟が彼女の面倒を見られるから・・・」と説明。「一年遅れでも、応募できるから大丈夫です」。私は彼女を見て無意識に「親の心配は海のように広い。子供たちは去ってゆく。今日は一人の少女が、弱々しげにあなたの懐へ」と詩を作った。

応募終了後、資料を女性書記へ渡して、その詩も見せた。「そのことで話があります」と彼女。「この女の子は智力障害者で、親は、男の子は大きくなったら、お金を稼がなければならないが、女の子は嫁に行かせるから知識力は関係ないし、だから華語を応募した」と。私は席に戻って、先ほど紙に書いた詩を持ち出し、それを小さく破って、窓の外の大空へまいたのだ。

華文伝承に希望の灯が芽生え詩を詠んだが、またすぐに沮喪と絶望へ落ちてしまい、詩をすてる羽目になった主人公の心境は、決して想像だけのものではないであろう。

作品⑨ 「龍のころ」 石君 (1940～)

学院は新学院院长 Mr.Ellis 氏と旧学院院长 ロバ・洪氏の送迎会について騒いでいる。しかし主人公の彼女やここにいる教員たちにとって、「二等教員」に過ぎない立場であり、みな黙々と宿題の添削をしている。旧院長は栄転で総部へ、勤めてまだ3年なのに・・・良い院長だったとの声もあったが、学科主任の彼女は、彼とはただ4回しか話したことはなかった。学生の華文受験の成績を報告している際、完全に無視されて、「うちは歴史の古い教会学府であり、英語がよいのは全国でも有名です。第2言語がよくなくても心配はないのです。例えば私自身も華語を話せないけど、一流学校の院長になれたじゃないですか？」と院長。「政府は2言語政策を提唱しているので、学生の素質もいいし、学校側さえ少し力を入れてくれれば・・・」と、結局彼女は言葉を飲み込んだのだった。その後4回目には学校の食堂で彼と会ったのだ。補習の学生と彼女がいっしょに補習資料を読んでいた時、彼は「どれぐらい印刷しました？こんなにいい紙で？」と。「学校の紙は使っていません。自払いで印刷しました」と彼女。学生も「そうなんです、先生に費用

払うと言っても、先生は受けとらないのです。」といった。

新任の院長に対し、学校内でも「行政人材がいないのか、なんで国の事情も知らない“外人”を院長にさせるのだ？」と波風が立っている。「誰だって同じさ、華人が院長務めても、華語を軽蔑しているし、まさか西洋人の院長に期待できるだろうか？」と彼女。

新院長は紳士の風格の方で、就任初日の午後、彼女は学生の補習を終わらせ、事務室へ帰ると、Mr.Ellis氏が目の前に現れた。慌てて「各主任の方はみな午前中に挨拶にうかがったのに、まだ挨拶にも行かなくて・・・」と彼女。「いいえ、私から挨拶をしても同じだから」と新院長。彼女がふだん英語をあまり使わないことを知って、彼女にゆっくりと華文（「第2言語」の言い方を使わず）授業のことを話し始めた。「ここに来る前に、この学校の学生たちの資質が高いことはよく知っています。みな英語（「第一言語」のいい方を使わず）が上手です。資質がいいから二つの言語をマスターすることは難しいことではないと思います。外国では、まず母国語ができるのは大事だが、優秀な学生は2、3種類の言語をマスターするのは一般的です。文部省は既に華文教師を増員すると約束してくれました。しかしうちの学生たちの華文成績を進歩させないとはいけません。何かいい提案があればいつでも遠慮なくどうぞ」と彼女にいったのだった。

中国の旧正月の1カ月前に、Mr.Ellis氏は休み時間にコーヒーを持って彼女のところにやってきました。「学生を集めて、旧正月の祝い行事でなにかできないでしょうか？もし時間がなくて、大変なら無理なくて大丈夫ですけど」と誠意あふれる笑顔で言ったのだ。彼女は、すぐに返事はしなかったが、他の先生と相談して、劇をやることに決めて、Mr.Ellis氏に伝えた。「20分だけの演出は短いから、もう少しなにかを加えて一時間の出し物にできないかね？レベルの問題じゃない。試合ではないから」と。翌日の朝礼後、院長自ら学生たちに積極的に出演に参加するよう呼びかけた。そしてついに50分間の演出が決まったのだ。しかし観客はそれでもガマンして見てくれるだろうか、彼女を含めた華文の教師たちは心配したのだった。練習で精神的にも肉体的にも疲れ切った彼女が、当日の公演終了後、大きな喝さいを受け、Mr.Ellis氏も彼女の後ろに立って、彼女のまねをして、学生たちに中国語で「很好！很好！謝謝大家！（よかった、よかった、みなさんありがとう！）」と。それを聞いて、一瞬、みんなも笑いだした。長い年月をかけてようやく新たな一歩が、確かに進んだのだと彼女は思った。そして手を伸ばして、院長に「ありがとう、Mr.Ellis」。

この作品のタイトルである「龍のこころ」は、華人社会における問題の部分的原点を指摘したと考えられる。短視的に自分の将来を計算し、単言語（英語だけ）へ進めても、いつかどこかで、華人としてのアイデンティティを捨てることはできないという宿命なのである。華語を「差別的」いい方をしないMr.Ellis院長は、多元文化への尊重について、自分たちの人生が、いかに豊かにできるかを学生たちに再認識させたであろう。

結 び

上述した作品の多数は、華文教育の現場または家庭の日常でのでき事を、生々しく描いたものである。第一章で述べたシンガポール政府が強いた華文教育の現実、華人たちに憂喜の思いをあたえ、躊躇と報われが交差する中、ところが激しく起伏され、常に現実の矛盾と激しく葛藤することを示唆したのである。作家たちの年齢からみれば、自分たちが若い時、華文教育が整えられ、彼らは最も華人文化を理解する教養を持つ世代であった。中年に入れば、華文教育の制度が波瀾な時代に突入し、華語の地位が時代の波にさらされ、激しく動揺する時期を通過するのである。そこで彼らが人生の後半を迎える時期に、作品が表現したように、これまでの華文教育の改正がもたらした「成果」と「後遺症」が彼らの人生に跳ね返って、家庭と家族のきずなを破壊させ、心を痛めつける結果につながったのである。

シンガポール政府の華語政策に対し、個人が自分の思考で対応することは、その個人が自己責任で、シンガポールで生きるための目標を目指す人生観と価値観である。当然その選択によって、さまざまな後遺症が生じ、犠牲を払わなければならない結果に繋がることもある。時代の変化は予測できないが、シンガポールの華人は、華人である以上、その個人が受けつく文化的要素は、実生活を通して、その伝承は膨大な力が潜んでいるのは事実であり、実生活に深く刻み込まれ、その記憶は容易に消せないのである。時代の変化に伴い、答えのない難問として、今後も華人社会を悩ませる課題であろう。

世界の華語使用圏が広い現実の中、地域ごとに、華語の基盤が固められて、初めて華文文学が成立するのである。シンガポールの華文文学を確立させるためには、創作する作家の育成だけではなく、読者層の育成も必要条件であろう。シンガポールの華文文学の位置づけは、今後も華語教育に深く関わるに相違ないと、私は考えている。

注 釈

注① 「新加坡当代**華文文学**作品选」(上)(下) 陈荣照 希尼尔 他編 新加坡青年书局/香港明报月刊 出版 2010

注② 「吾土吾民創作選」は計6冊で、小説が2冊の他に、詩、散文、戯曲、詞が各一冊である。

注③ 「東南アジア文学への招待」のシンガポール文学部分について、幸節みゆき氏が訳と編集を担当して、「解説」「作品」と「シンガポール近現代文学史年表」を執筆している。

注④ 「散文」は駱明氏(シンガポール文芸協会会長)と長河氏(熱帯文学クラブ会長)、「小説」は希尼尔氏(シンガポール作家協会会長)、「詩」は烈浦氏(錫山文芸中心会長)でそれぞれ主編を務めている。

注⑤ 作品集の冒頭にある希尼尔氏の前言「南方島嶼小説備忘録」を参照。

注⑥ 陳志銳 「新加坡**華文**及文学教学」第一章を参照。

注⑦ 文学の範疇において、アメリカイェール大學教授Harold Bloomの「影響的焦り」(The anxiety

of influence) の概念から、文学創作において、後者が前者の影響から脱出したい意識が強い反面、使用言語の選択には、自分の言語が他人と異なり、理解してもらえないことに対する焦りの意味である。(6を参照)

注⑧ 陳志銳 「新加坡**华文及文学教学**」第二章「**文学批評の能块培养**」を参照。

注⑨ 同8を参照。

注⑩ 20世紀80年代初シンガポール文部省の措置、華族家長は入学前の子供に華語啓蒙クラスへ入学し、卒業後自動的に華文小学校一年生へ上がることができる。

主な参考資料

- 「東南アジア文学への招待」 宇戸清治 川口健一編 段々社 2001
「国家と移民－東南アジア華人社会の変容」 田中恭子著 名古屋大学出版会 2001
「シンガポール華文小説選 (上)」 福永平和 陳俊勳訳 勁草書房 1983
「シンガポール華文小説選 (下)」 福永平和 陳俊勳訳 勁草書房 1990
「マレーシア シンガポール華人史概説」 唐松章著 鳳書房 1999
「新加坡**华文及文学教学**」 陳志銳著 浙江大学出版社 2011
「南洋**华侨**与**閩粵**社会」 陳达著 北京**商务印书馆** 2011
「馬華文学與中国性」 黃錦樹著 麥田出版 2012
「新加坡**马来西亚华侨史**」 林远輝 張应龙著 广东高等教育出版社 2008

(せき きりん：アジア文化学科 教授)

